



「見たり、聞いたり、探ったり」No.224

通算 No.376

青木行雄

高野山「高野山金剛峯寺」に参拝

高野山と言えば真言宗の宗祖である空海が開創した和歌山県にある寺町の場所だという事ぐらひは多くの人が知るところであろう。

今回、何年振りかに友人と同行し参拝したので改めて記してみた。あの2kmあまりの参道に林立している杉の大木は見事と言うほかないが、それに墓碑、供養塔等の設置の数の多い事はこれまた大変な数で、1200年の歴史が物語るように、歴史上の人物から、現在の大会社の塔まで入れると20万墓を超える数という。ゆっくり見て廻るとすれば、何日もかかりそうな、そんな場所である。

では、まだ行かれていない方の為に「高野山」について詳しく記してみたい。

高野山とは

和歌山県北部に位置し、周囲1,000m級の山々に囲まれた標高約900mの平坦地に位置する。100か寺以上の寺院が密集する境内総坪数、48,000坪にもわたるといふ広大な場所で、日本では他に例をみない宗教都市なのである。京都の東寺と共に、真言宗の宗祖である空海(弘法大師)が修禪の道場として開創した真言密教の聖地なのである。



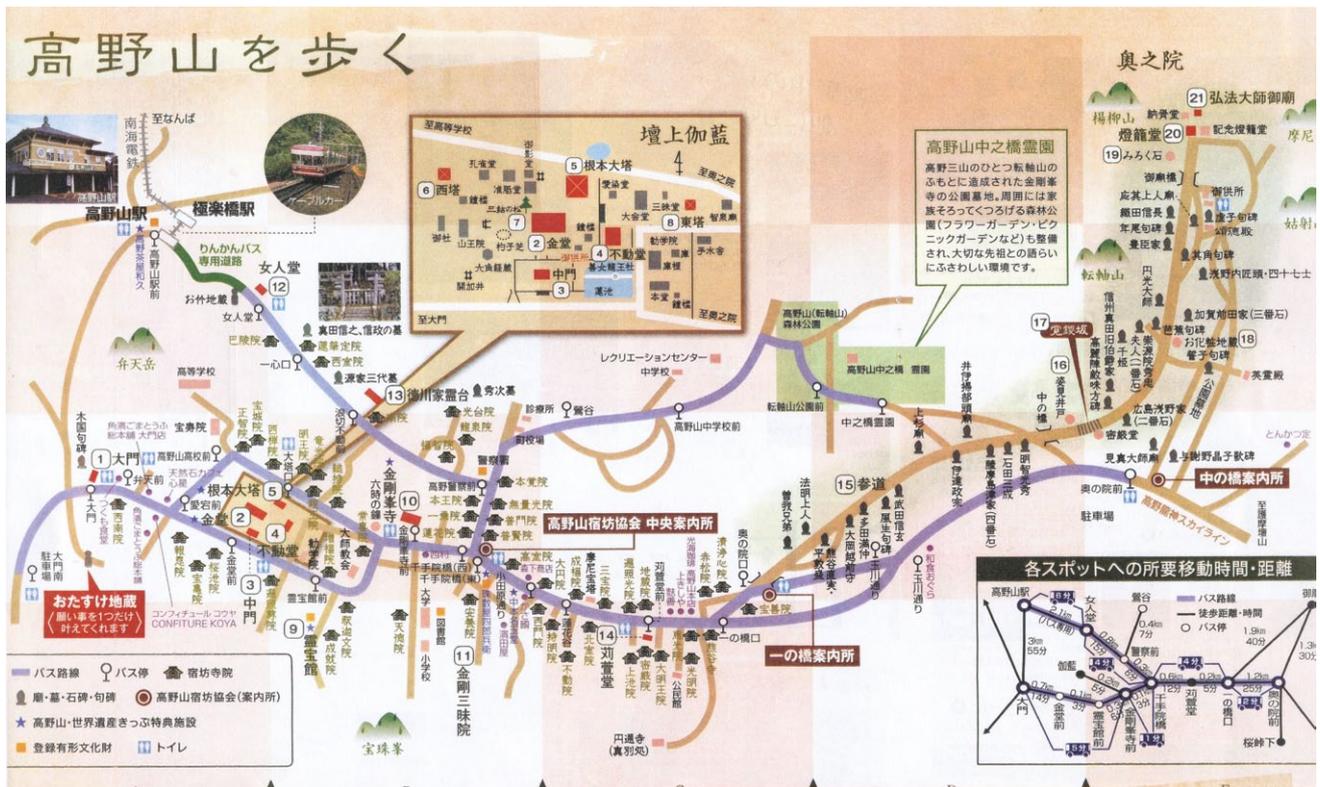
※南海電気鉄道・南海高野線のケーブルカー



※ケーブルカー。極楽橋より約5分で高野山の駅に到着。ここからバス又はタクシー



※ケーブルカーの始発駅の看板



信仰の中心になるのは

山内の西寄りに位置する「壇場伽藍」(壇上伽藍)と呼ばれる境内地で、ここには金堂、根本大塔を中心とする堂塔が立ち並ぶ。このすぐ近くに我々の宿泊した宿坊「總持院」がある。

この他に「子院」(塔頭)と呼ばれる多くの寺院が立ち並び、高野山大学、霊宝館(各寺院の文化財を収蔵展示する)などもある。

空海(弘法大師)信仰の中心地である奥之院は、一の橋からさらに2kmほど歩いた山中にあった。

総本山金剛峯寺という場合、金剛峯寺だけではなく高野山全体を意味するという。

2004年(平成16年)7月に登録された、ユネスコの世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産の一部もここにある。

804年(延暦23年)正規の遣唐使の留学生(るがくしょう)として唐に渡航して、長安・青龍寺の恵果に密教の奥義を学び、天才ぶりを認められ、伝法阿闍梨位の灌頂を受け、恵果の法統を嗣ぎ、遍照金剛(へんじょうこんごう)の灌頂名を与えられた。

806年(大同元年)帰国し、816年(弘仁7年)、嵯峨天皇から高野山の地を賜った。空海の在世中に完成した堂宇はごくわずかで、空海の他界後、弟子であり実の甥でもあった真然が約20年かけて根本大塔などの伽藍を整備した。835年(承和2年)には定額寺に列し官寺に准ずる寺格を得たが、994年(正暦5

年)に落雷による火災で、ほとんどの建物を失い衰亡の時期を迎えたという。

荒廃した高野山は、1016年(長和5年)頃から、定誉によって再興された。平安末期には白河上皇、鳥羽上皇が相次いで参詣するなど、次第に信仰を集めて栄え、寺領も増加して行ったという。

源平の争乱期には、高野山で出家する貴族や武士が目立つようになった。また、北条政子が亡夫源頼朝のために建てた金剛三昧院のように、有力者による寺院建立もあり、最盛期には高野山に2,000もの堂舎が立ち並んだという。この時代のものも建立された墓碑や供養塔等もあるのだと思う。

戦国時代、武力を蓄えていた高野山は、比叡山焼き討ちや石山合戦を行った織田信長と対立し、信長は数万の軍勢で高野山に差し向けたが、ほどなく信長が本能寺の変に倒れ、高野山は難を免れた。このような事変を聞くと大変興味のあるところでもある。

豊臣秀吉には武士出身の僧・木食応其が仲介者となって秀吉に服従を誓ったため、石高は大幅に減らされたものの、高野山は存続することができたようだ。後に秀吉は応其に帰依して寺領を寄進し、また亡母の菩提のため、山内に青巖寺(現在の総本山金剛峯寺の前身)を建てた。

やがて武士の間で高野山信仰が広まり、戦国大名が出資した子院が数多く造られていった。子院で宿坊の高室院は、北条氏の菩提寺となった。

北条氏が滅ぶと、当主の北条氏直は高室院に隠棲して生涯を終えたという。

近世に入ると、徳川家が子院の大徳院を菩提所・宿坊と定めたことから、諸大名を始め多くの有力者が高野山に子院(宿坊)霊屋、墓碑、供養塔などを建立するようになっていった。

全長2kmにわたる高野山の奥之院の参道沿いには、今も無数の石塔が立ち並び、その中には著名人の墓碑や供養塔も多くあった。

以上、高野山、高野山金剛峯寺の説明を簡単に記したが、山内に117ヶ寺の内52寺が宿坊を兼ねており、どの寺も歴史は古いと思う。1200年の歴史のあるこの高野山、長い間に堪えた寺(宿坊)も多くあり、現在繁盛している坊など様々のようだが、縁あっての私達の宿泊した宿坊(總持院)について記してみたい。

別格本山「そうじいん總持院」

高野山二十八世行恵總持房の開基にして、平安時代・久安年間(1145年～1150年)の創建された名刹である。弘法大師草創の本中院谷にあり、門前に七堂大伽藍を控え、東隣りには総本山金剛峯寺と云う絶好の場所に位置している。

この「總持院」の食事の時の箸入れの袋にこんな事が書かれていた。

食事の観念・合掌

1. 一滴の水にも天地のめぐみがこもっております
2. 一粒の米にも万人の力が加わっております

ありがたくいただきます

食後 御馳走さま

※ 「伽藍」とは梵語(サンスクリット)のサンガ・アーラーマの音訳で、本来僧侶が集い修行をする閉静清浄な所という意味である。高野山金剛峯寺は816年(弘仁7年)空海(弘法大師)によって開創された。空海は高野山の造営にあたり壇上伽藍から始めて、密教思想に基づく金堂、大塔、西塔、僧房等の建立に心血を注がれたという。

御参拝順路について記してみたい。

1. 金剛峯寺

豊臣秀吉が、1593年(文禄2年)に亡母追善のため、建立したもので、当時、青巖寺といったが、今は全山の総称である金剛峯寺と号し、真言宗の総本山で全国に四千余の末寺を持っている。

2. 大 門

高野山の総門、幅十間、奥行四間、高さ二十三間、銅瓦葺の巨大なもので、左右の金剛力士は浪華法橋運長の作という。1625年(寛永2年)落慶供養



※金剛峯寺の正門。石段をのぼった所

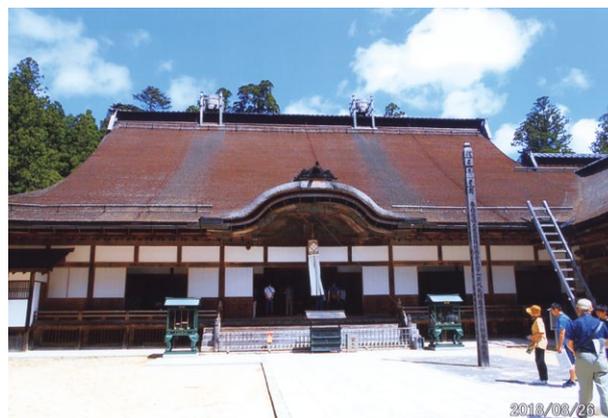
3. 中 門

中門は大門が高野山の総門であるのに対して、法要を行う上で最も重要な伽藍への正門として重要な守護の役割を果たしている。

2015年(平成27年)開創1200年を記念して約170年ぶりに再建された。

4. 金 堂

一山の講堂、弘仁年間、弘法大師の創建による嵯峨天皇御願堂である。現在の建物は、1932年(昭和7年)に再建されたもの、本尊は丈六の薬師如来(秘仏)で壁画は木村武山の筆。拝観料200円



※金剛峯寺の本山。5万坪近くの広大な境内があるという

5. 根本大塔

真言密教の根本道場で、高さ十六文、16間4面、本尊は胎藏界大日如来と金剛界4仏、現在の建物は、1937年(昭和12年)に完成なったもの、勅額「弘法」の二字は内部正面の欄間に奉掲されている。壁画は堂本印象の作。高野山のシンボルと言われている。(高さ48.5m)(16間-23.5m) 拝観料200円



※夜の「中門」2015年(平成27年)に172年ぶりに再建された「中門」である

6. 御影堂

弘法大師がお住まいになっていたといわれるお堂で、現在のお堂は1848年(嘉永元年)紀州・徳川公が壇主として再建されたもの。真如親王の御筆になる大師の御影が安置されてから御影堂と呼ばれるようになった。



※一山の総本堂として重要な法会が営まれる「金堂」で側面から写す

7. 霊宝館

重層宝形造りの建物で1921年(大正10年)に建てられた。1200年の歴史を持つ山内に残る5千点に及ぶ国宝・重文・県文化財や、貴重な資料が保存されており、常時一般拝観が出来る。

8. 奥之院

老杉や桧が茂る中に20万基を超える墓や供養塔が並ぶ奥之院。これは弘法大師の足下に眠れば極楽往生できるという信仰によるもので、これらの墓石の中から歴史上の人物の殆どを見出すことができる。また墓石にまじって「父母のしきりに志し雉子の声」という芭蕉や其角の句碑などもある。老樹の間から木漏れ日が射し、線香の香りが漂う中を歩くと、ひとりでの荘厳な気分になって、ふだんの生活や悩み事など忘れる程である。

9. 奥之院御廟

「大師はいまだにおわします」

入定留身の地

弘法大師ご入定のあと、弟子たちは大師が希望していた通り、足元に玉川の清流が流れるこの地に廟を建てた。大師は変わらない姿で今でも「瞑想を続けておられる」と信じられ、1200年間毎朝、毎夕食事を届けるという。参道をのぼり、御廟橋を渡ると聖地となり写真も写すことは出来ない。



※大伽藍の入口の門。ここから蛇腹路を通り根本大塔へ



※夜の根本大塔。照明の明かりで実に美しい。高さ58.5m。ばかでかい建物である



※昼のみごとな美しさを見せる根本大塔。48.5m、朱塗りの大塔



※大木の杉並木。2kmあるこの並木の中に20万基ともいわれる墓碑と供養塔などがある

10. 徳川家霊台

1643年(寛永20年)3代将軍家光が建立した建物で、家康・秀忠の両霊屋、白木造りの外観に金銀箔を押しした極彩色の厨子は日光東照宮を思わせる豪華な造りである。国宝。(拝観料200円)

高野山には、かなりの建物や文化財が多くある。興味があれば、是非行かれる事をおすすめするが、高野山恒例法会が沢山ある。この日に合わせて行くとまた違う想いがあるかも知れない。その一つに「結縁灌頂」というのがある。

「結縁灌頂」とはマンダラの世界に入り、仏様とご縁を結んでいただく、真言密教における最も尊い儀式という。



※御廟桜を渡ると奥に大師御廟が見える

「結縁灌頂」の功德

「私達は日々、迷ったり、不安になったり、身勝手になったりします。埃が知らず知らずのうちに溜まっていくように『心の埃』(迷い・不安)も溜まっていくものです。『結縁灌頂』に入壇しますと、あたかも霧が晴れるように『心の埃』が消え去り、大いなる大宇宙の仏様・大日如来と自分が深く結ばれている実感を得ることとなります。迷いと不安を離れ、正しい道にお導きいただける功德を授かるのです。心の再生をはかり、本来の清らかさを取り戻すために、何度でも入壇していただけます。」

「結縁灌頂」という儀式の説明ですが、春の胎藏界と秋の金剛界の2回、金堂で入壇儀式を受けることが出来る。

パンフレットの説明をそのまま記したが、1200年の伝統が今にもいきいきと継続されている姿をこの儀式のように、見て廻って、垣間見る事が出来る。何れにしても、厳粛にして1200年の歴史がひしひしと伝わって来た。

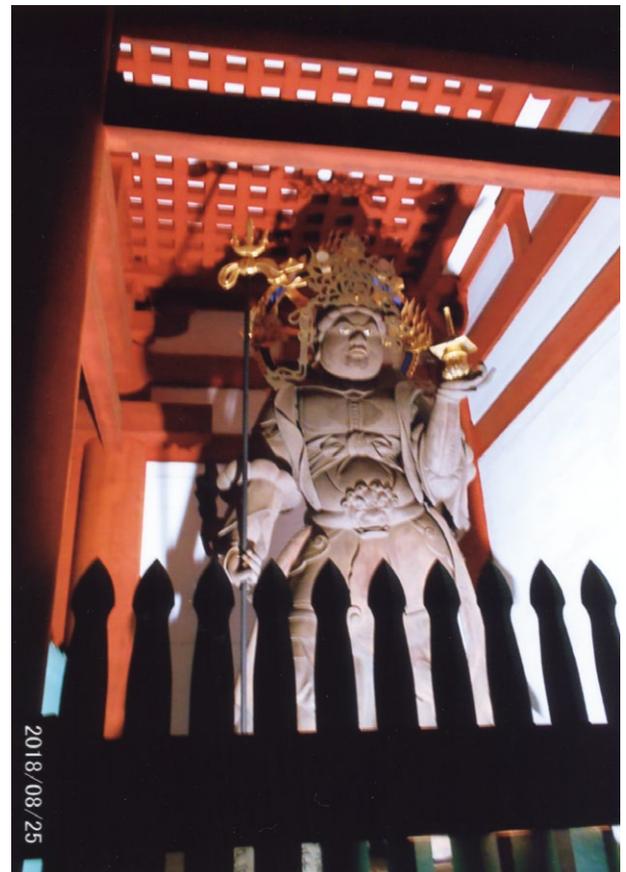
平成30年9月16日

参考資料

高野山パンフレット



※「中門」の仁王像。正門に向って左側の像である



※「中門」の仁王像。正門に向って右側の像である

「木場ことば」

内符牒〈うちふちょう〉

◆本ロツソレタヨ山キは、木場の通り符牒である。木場の仲間同士でやりとりをするときだけに通じて、第三者には何のことかわからないところに符牒たるゆえんがある。

◆ところが、本ロツは、仲間では誰にでもわかるので都合の悪いばあいがある。そのために各店には、その店独自の符牒がある。これが内符牒である。内密の符牒ということである。また裏符牒ともいうが、これは裏帳面、裏金などというのと同じ裏の使い方である。

◆内符牒も徳島系問屋のオシロヤマニメタテや、某系のカモキタソレツラメや、アサオキフクノカミなどのように、よそに知られてしまうと、もう内符牒がだめになる。こんどは新しく何か工夫しなくてはならない。

◆符牒が木口に小さく書かれていて、小従業員さんが、それを横目でながめながら、お客と対応しているというような図は、いまの木場には少なくなった。明朗商売時代になったからであろう。

◆しかし、客との掛け引きのむずかしいときには、店主が奥の方でサインをして、商談を促進させる手がある。このサインもまた内符牒ということができよう。

引用文献：『木場ことば集』 宮原省久編著 東京木材市場株式会社 昭和44年(1969年)11月
p.38～p.39

